詠む広場

毎日俳壇

小川　軽舟　選

籐椅子に来し方妻と語らへり
東　京　東　賢三郎

〈評〉長く連れ添った妻であれば思い出話はつきない。時折きしむ籐椅子が、おだやかな老境の静けさを引き立たせる。

揺れ残るふらここ二つ春夕焼
国立市　佐藤　建

〈評〉今し方まで子供が2人こいでいたブランコ。ブランコはまだ遊び足りないような。

母の日に母逝きにけり母らしく
つくば市　小林　浦波

昭和の日昔の家を訪ねけり
仙台市　伊藤　和彦

桜蘂降る応援歌遠くより
東　京　茂田野マイ子

くたびれて立ち寄る店や余花の雨
北九州市　寶満　光保

あつさりと歳をとりたり万愚節
東　京　江川　文江

春雷や柿落しの大太鼓
松阪市　赤塚　弘一

AIの応答瞬時春の雷
千葉市　青山希久子

落人の墓をうしろに田植かな
葛城市　山中　由子

西村　和子　選

かぎろひや橋の途中で人消ゆる
東　京　望月　清彦

〈評〉かげろうは遠くのものが揺らいで見える陽春の現象だが、真昼の神秘的光景を目の当たりにしたような作品。

麦秋の真中まっすぐ一輛車
高山市　直井　照男

〈評〉一読して、大景が目にうかぶ。あ段の音の連なりが明るさを表して効果的だ。

朝寝せり朝寝の一句出来るまで
和歌山　神野　一馬

ひねもすの雨の八十八夜かな
長浜市　中島　正則

葉桜や旗日の旗のよく靡き
鎌ケ谷市　海野　公生

自転車を押しゆく二人花水木
浜松市　久野　茂樹

荒くれを遣り込めてゐる祭髪
名古屋市　可知　豊親

擦れ違ふ人の嘆息朧の夜
川崎市　折戸　洋

夜桜やさらに奥へと誘はれ
青森市　小山内豊彦

夜鷹鳴く旅の枕や眠られず
上尾市　山口　流離

井上　康明　選

明日のこと明日考へむあめんぼう
直方市　岩野　伸子

〈評〉明日のことは明日考えることにしよう、何とかなるだろう。アメンボはとらわれることなく、自在に水面を滑っている。

夏空を蹴り上げバーを越えにけり
浜松市　久野　茂樹

〈評〉棒高跳びの一瞬を描く。選手は夏空を蹴り上げ、軽やかにバーを越えていく。

山山は欲に応へほととぎす
唐津市　梶山　守

大仏に日の当りたる晶子の忌
相模原市　はやし　央

乗り降りの影なき駅舎ほととぎす
相模原市　小山　鞠子

とどまれば水底に影あめんぼう
八街市　山本　淑夫

田植機に拾はれてゆく下校の子
名古屋市　可知　豊親

春の星原子炉近く子の住めり
和歌山市　中筋のぶ子

つぎつぎと瀬へとんで鮎上りけり
町田市　枝澤　聖文

南風がセガンティーニの筆を押す
加古川市　石村　まい

片山由美子　選

幸福と思ふときあり卓の薔薇
我孫子市　新井　貴雄

〈評〉逆に言えば、ふだん幸福などと思ったりはしないということに。卓上に飾ったバラの花の美しさに惑わされたかのよう。

薔薇香るモデルルームのよそよそし
大　阪　芹澤　由美

〈評〉この句も、美しいものにひそむ偽善の匂いを、モデルルームという非現実に重ねた。

はかどらぬ仕事に倦むや梅雨の月
尾張旭市　小野　薫

咲きつくすひと日の色や仏桑花
東　京　草野　准子

床の間のどこへ活けても白牡丹
つくば市　有阪　貴男

樟若葉ことさら雨に輝きて
池田市　高倉　明子

長男の家から届く筍飯
上尾市　清水　昇一

学校の花壇六つや風薫る
東　京　渡邊　顯

背伸びしてたんぽぽの絮まるくなる
平塚市　高橋　佳代

青げらの幹突く音や奥社
上尾市　山口　流離

新刊

＜句集＞

◇前田霧人『新歳時記通信　歳時記篇（へん）』　2分冊の1。第1部「暦と天地」、第2部「気象」。古今の歳時記を暦学的、文献的に検証しており、例句も豊富。そもそもの暦の成り立ちから筆を起こし、旧暦・新暦とは何か、新暦に基づく歳時記とは何かへと進む。圧倒的なのは駆使した文献の多さであり、読み物として、また実作者の道しるべとして大いに役立つ一冊である。（コールサック社・8800円）

◇同『新歳時記通信　俳論篇』　2分冊の2。「俳句論」「ホトトギス論」「歳時記雑話」「俳人の一句」「篠原鳳作論」及び付録から成る。とくに「ホトトギス雑詠の無季句」が興味深い。（同・2530円）

◇高山れおな『百題稽古（けいこ）』　第5句集。六百番歌合（うたあわせ）の題による題詠など、挑戦に満ちた一冊。〈梅雨寒し恋が寝覚を刺しに来る〉〈光年の駅の別れやほととぎす〉〈苔（こけ）の花千手千眼とはしづか〉（現代短歌社・3300円）　（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇志垣澄幸『雁喰（がんくい）』　著者は宮崎市の在住地の古名を歌集題につけた。日々の暮らしが言葉によって広がりを得ていて真摯（しんし）な姿が歌から浮かぶ。第6歌集。〈椅子の影くきやかに落ちてゐる庭にわれにも影があるかふと見る〉（江南書房・2200円）

◇渡英子『メロディアの笛Ⅱ　白秋の昭和』　総合短歌誌「短歌往来」に連載した文章に訂正、加筆して一冊にまとめた評論集。『メロディアの笛　白秋とその時代』の続編である。昭和期の白秋に焦点を絞り資料を駆使して、白秋の文学世界を丁寧に探究する。（ながらみ書房・2970円）

◇滝本賢太郎『月の裏側』　ドイツ文学者である著者の14年間の作品を収録した第1歌集。知的にとらえ、あるときは親しみやすい口語をまじえて今という時間を表現する。〈ソロキャンプとさして変わらぬ生活で火を焚（た）くごとく翻訳をなす〉（六花書林・2750円）

（歌人・中川佐和子）